

# 最終発表

チーム環境  
メンバー：吉原芳歌  
奥谷侑実  
増田浩太  
加納由菜

## 能登研修前

自分たちに何かできる  
ことがあるのではないか。  
役に立ちたい!!!



✧ 希望に満ち溢れていた ✧

研修前の私たちは、能登のために自分たちに出来ること、役立てることがある  
かもしれない。そんな期待に胸を膨らませていました。

私たちの意見・疑問	能登で聞いた意見
Q 耕作放棄地で困っているのでは？	A イノシシ等の害獣被害はあるが、特に困ることはない
Q 担い手不足を解消するため、後継者を早急に確保すべきでは？	A 担い手は欲しいが、長年受け継がれてきた今のやり方を変えるつもりはない 自分がやりたいから続けているだけで、後継者は求めている
Q 外部の人間にできることはないだろうか？	A 一時的に来ても難しい技術が必要なため手伝うことがない。ボランティアではなく長期雇用者が欲しい
Q 能登の知名度を特産品で上げれるのでは？	A 量が少なく、大規模な販売は難しい 地元の人々にしか売れる気がない

自分たちに出来ることはないのではないか

そのため、私たちは能登の方々が困っていること、能登のために出来ることなど様々な問いや仮説を立て研修に臨みました。

しかし実際に現地の方に話を伺うと、担い手が欲しいが今の形は変えたくない、知名度は上げたいが量が少ないから売れないなど自分たちが想定していたものと異なる返答でした。

そのため解決するには困難な回答が多く、次第に自分たちに出来ることはないのではないかと思うようになりました。

## 中間発表

能登の自然を守るためには人の力が必要不可欠

→人手不足による問題を解消すべき

そのために…

作業の機械化による効率化

伝統を受け継ぐ中で妥協点を見つける必要あり

しかし、そのような状況の中でみんなで話し合っ「自然保護のためには、自然環境に介入する人手が必要であり、担い手を増やすことが解決につながる」と考えました。

そのため中間発表では、担い手不足をどのように解消するかをテーマに発表しました。

その際に、機械を導入することや、伝統を全て受け継ぐのではなくその中から妥協点を見つけることで作業の効率化をはかるべきではないかと提案しました。

## ～転換期①～ 教授からのアドバイス



能登の人々にとっては伝統を継承していくことに誇りがある。  
その思いをないがしろにして効率化することは正しいか。  
全国には思いに共感した人が移住して受け継ぐケースもある。  
全国にはそんな熱い志を持っている人もいる。  
効率化していくことが担い手不足解消につながるとは限らない。

一方で、能登の方々の気持ちも考慮すると、この提案の実現可能性について疑問を持つようになりました。

そこで私たちは金沢大学地域創造学類の林直樹教授に意見をいただくことにしました。教授からは、能登の人々にとって伝統を継承することに誇りがある。その思いをないがしろにするのは正しいのか。  
また、全国には厚い志を持った人が、思いに共感し移住して受け継ぐケースもある。必ずしも効率化していくことが解決策になるとは限らないとアドバイスをいただきました。

このことから、自分たちが今の形を変えなければ伝統を受け継ぐことが出来ないと固定観念に陥っていたことに気づきました。  
また、担い手不足解消において、必ずしも今の伝統の形を変えていく必要はないのかもしれないという新たな視点を得ることが出来ました。

## ～転換期②～ 千枚田の収穫の企画・参加

- ・手刈りで稲を刈る。手作業で稲を束ねて天日干しする。  
(外部から見れば苦痛で大変なこと)
- ・誰も辛そうな顔をしていなかった。  
ウチ・ソト関係なく皆んなで笑い合っ  
て楽しく作業が出来た。

⇒これはこれで一つの形



また夏休みには、研修でお会いした千枚田愛好会の方々と千枚田の収穫を企画し、実際に参加してきました。米の収穫を全て手狩りで行い、その稲を結んで天日干しをするという作業でした。

参加する前は、外部である私たちから見ればとても大変な作業であり、乾燥機で稲を乾燥させるなど工夫をすれば効率化できると感じました。

しかし、私たちは作業を進めていくうちに楽しいと感じるようになり、周りを見ても誰も辛そうな顔をしていないことに気づきました。皆んなでしゃべりながら楽しく作業を終えることが出来ました。とくに作業中にウシガエルを見つけた際に、みんなが小学生のようにはしゃいでいたのは印象的でした。

この経験は機械を導入したり、伝統的な技術を効率化していたら得られなかったかもしれないと思いました。そして千枚田はこれはこれで一つの形として残っていても良いのではないかと感じるようになりました。

## これまで

千枚田…伝統的、文化的技術を守りたい。千枚田は機械が入れずほぼ手作業。

塩田…シフト制でも可能だが、品質のために16時間一人で煮るシステムを変えたくない。震災が起きるまで、何往復もして手作業で海水を運ぶ。

こだわりが強く、大変な作業を続けるから担い手が現れないのではないか。  
若者が受け継ぎやすい環境に整備すべき。

ここで簡単に私たちの気持ちの変化をまとめます。

これまで私たちは職人の方々の伝統的な技術を守りたい、変えたくないという思いに対して堅苦しい、こだわりが強いと否定的に捉えていました。

またこのような大変な作業を続けるから新たな担い手が現れなくなっているのではないか、だからこそ若者が受け継ぎたい環境に整備すべきだと考えていました。

## 現在

能登の伝統や文化の中には外部から見れば面倒で大変なことを続けているように思えるものもある。しかし、そこには情熱や先人達の知恵を大切にする気持ちがある。

これこそが能登の魅力ではないか

しかし現在は、夏休みでの経験を通して、そこには能登の方々の情熱や先人達の知恵を大切にする気持ちがあるということをもっと以上に感じるようになりました。

そして私たちは、伝統を守り続ける姿勢こそが能登の最大の魅力ではないかと考えるようになりました。

## 現在

だからこそ伝統を途切れさせたくない。  
本当に思いに共感できる人に受け継いで欲しい。

だからこそ能登の伝統を途切れさせたくないという思いがより一層強くなりました。

また、形としてただ能登の伝統を受け継ぐ、誰でもいいから担い手になってもらうのではなく、本当に職人さんの思いに共感できる人にこそ受け継いで欲しいと感じるようになりました。

## 現状

- ・ 震災により加速した人口減少（珠洲市では人口1万人を切る）

- 
- ・ 能登へのアクセスの困難さ  
（金沢市から片道2～3時間。県外の人に行くことは困難）



能登での人口増加は重視しない

しかし能登の伝統を守りたいと強く思う一方で、能登の現状には厳しいものがあります。

これまでも進んでいた人口減少が震災により加速し、珠洲市では人口1万人を切りました。

また能登には立地によるアクセスの困難さの課題があります。例えば金沢から能登へは片道2～3時間ほどかかり、県外の人々が能登へ行くことは困難です。

そのため、私たちは能登での人口増加は重視しないことにしました。

## 現状

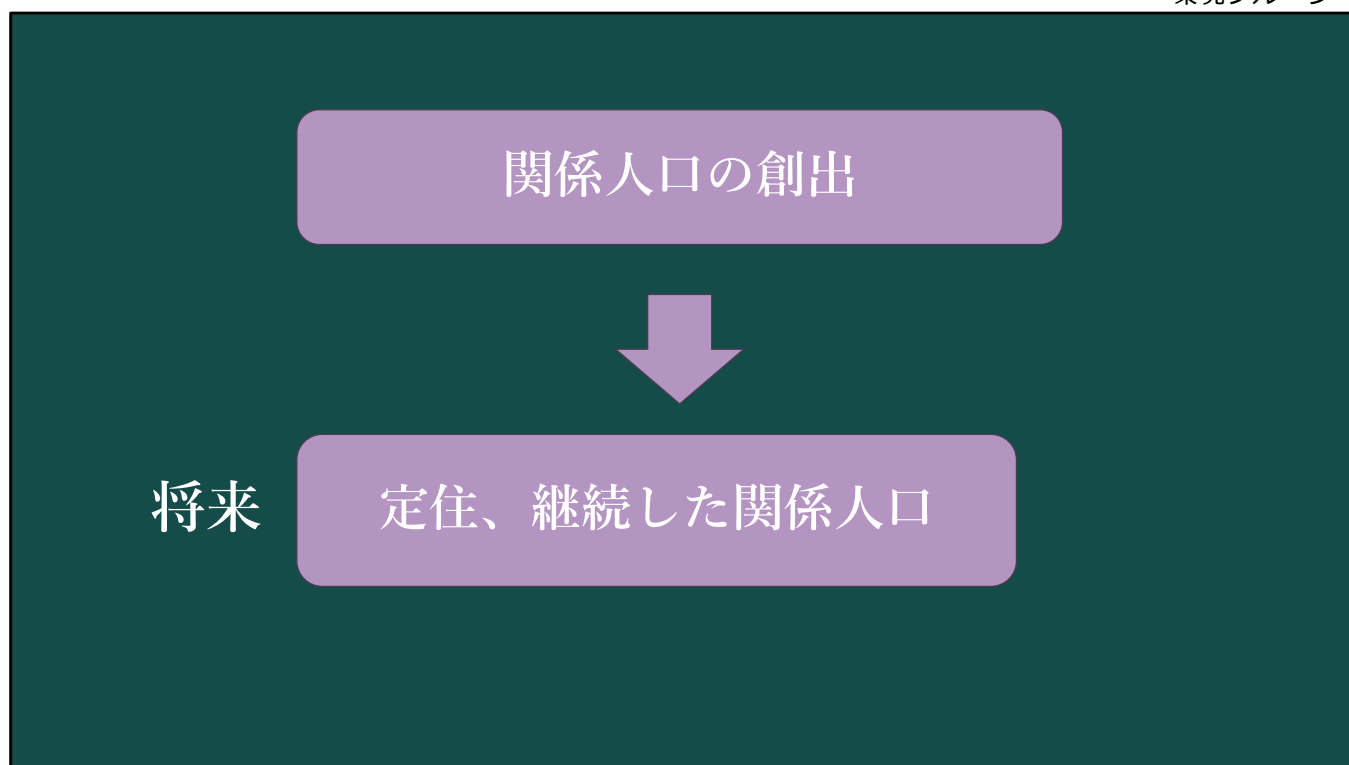
インフラの整備等 ex)能登に速く行けるように道路を整える。

→行政がやるべき

大学生だからこそ出来ることを  
重視すべきではないか

この現状分析から、アクセスを良くするためにインフラを整備すればよいと考える方がいるかもしれませんが。しかし私たちはそれは行政がやるべきことであり、私たちが提案すべきことではないと判断しました。

そのため、私たちは大学生だからこそ出来ることを重視するべきと考えました。



以上のことを踏まえて、私たちはこのスライドに示す二段階の仕組みを提案します。

私たちが大学生が能登に通う、つまり関係人口を創出するきっかけを作り出し、能登で深い関係性を構築する。

そして能登に通う経験を通じて地域に愛着を持った人が、やがて移住、継続した関係人口という形で能登を支える新たな担い手となる。

この流れこそが私たちが目指す最終目標です。

## 提案 「能登に大学村を作る」

能登大学村とは…

大学生を中心に能登を訪れ地域の人と交流する取り組み

計画)

空き家などを改装し、素泊まりをして土曜日と日曜日に能登に定期的に通う。

目的)

住民の方など内部の関係を深める。一人の住民として過ごす。

この目標を達成するために私たちが考えたアイデアは、「能登大学村」です。

能登大学村とは、大学生を中心に能登を訪れることで地域の人と交流する取り組みのことです。空き家などを改装し、素泊まりをすることで土日に能登へ定期的に通うことを想定しています。

この活動の目的は、自分たちが一人の住民として過ごすことで、住民の方々と内部の関係を深めていくものです。内部の関係とは、一人の住民のように対等に住民の方と交流していく関係のことです。

## 例) しらみね大学村

(活動主体)

白山市の白峰地域を拠点として活動する大学生の団体

(活動方法)

空き家を改装し、定期的に通う

(活動内容)

山菜採り、郷土料理作りなどの体験、登山やハイキングなどの自然体験、祭りの参加、地域の歴史・文化を保存するための資料作成



具体例として、白山市の白峰村には、実際に白峰大学村があります。

しらみね大学村では白峰に定期的に通うことを通して、山菜採りや郷土料理作り、登山やハイキングなどの自然体験、また祭りの参加や白峰村の歴史や文化を保存するための資料作成などを行っています。

私たちはこの取り組みが能登にも活かせるのではないかと考えました。

## 大学生であることのメリット



- ・ 大学というブランドで信頼関係を構築しやすい
- ・ 利益を目的とせず活動出来る
- ・ 金沢市内に住んでいるため、継続的に能登に通うことが出来る
- ・ 次世代に受け継ぐことが出来る

活動の主体が大学生であることのメリットは、

- ・ 大学というブランドで住民の方々に信頼を得やすいこと
- ・ 企業とは異なり目先の利益を求めずに活動を行えること
- ・ 金沢市内在住のため継続的に通うことが出来ること
- ・ 一度団体を作れば私たちが卒業した後でも後輩に受け継ぎ、継続した関係人口を生み出せること

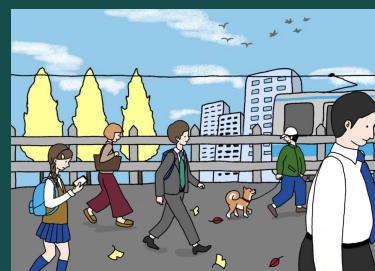
などです。

## 期待される効果① 「関係人口の増加」

関係人口とは…

移住はしていないが、特定の地域と継続的に関わる人々のこと

※統計上、人口には含まれない



将来的に能登に興味を持った若者が移住、関係を持ち続ける場所を作る

”きっかけづくり”

では実際に、能登に大学村を作ることによってどのような効果があるのでしょうか。

期待される効果の1つ目は、関係人口の増加です。

関係人口とは移住はしていないけれど、観光客のように一時的で終わらない、特定の地域に継続的に関わる人々のことです。関係人口は観光以上移住未満と言われ、これからの地方創生で期待されています。

私たちはこの大学村を通して、若者に能登に興味を持ってもらい、将来的に移住したり、関係を持ち続けるきっかけ作りを実現していきます。

## 期待される効果② 「つながりの深化」



ボランティアでは、外部の人が助けて”あげている”状態に留まってしまい、本音が聞けず、住民の方との交流が出来なくなりがち。

大学村をすることによって、一人の住民として能登に関わる深い関係の構築が実現できる。

期待される効果の2つ目は、繋がり深化です。

私は入学して半年間ボランティアサークルとして活動を行っていました。しかし、ボランティアでは災害派遣で住民の方々との交流をする機会が少ないこと、住民との交流はあっても精神的なサポートのような活動が多いことに違和感を感じました。

ボランティアでは「自分が誰かを助けてあげている」という感覚から自己満足に陥ってしまい、実際に支援を必要としている方々と同じ目線に立てていないことに気づきました。

だからこそ大学村では住民の方々と交流を大切に、助けてあげるのではなく、住民の一人のような対等な立場で住民の方々と交流することを重視していきます。

## 期待される効果③

### 「伝統・文化の継承」



担い手不足により、伝統・文化が失われる可能性

→(1)大学生が資料として保存、論文を書く（職人さんの思いをくみ取って書くことが出来る）

(2)内部の人間として祭り、伝統的な技術に加担

将来職人になる人材、移住者の創出。  
未来に資料として能登の文化を継承することができる。

期待される効果の3つめは伝統や文化の継承です。

担い手不足で騒がれている現在、いつどの地域で伝統が途切れてもおかしくありません。それは能登も同様です。

しかし私たちは職人さん達の熱い思いを知ったからこそ、時代の流れと共にその思いが失われて欲しくありません。

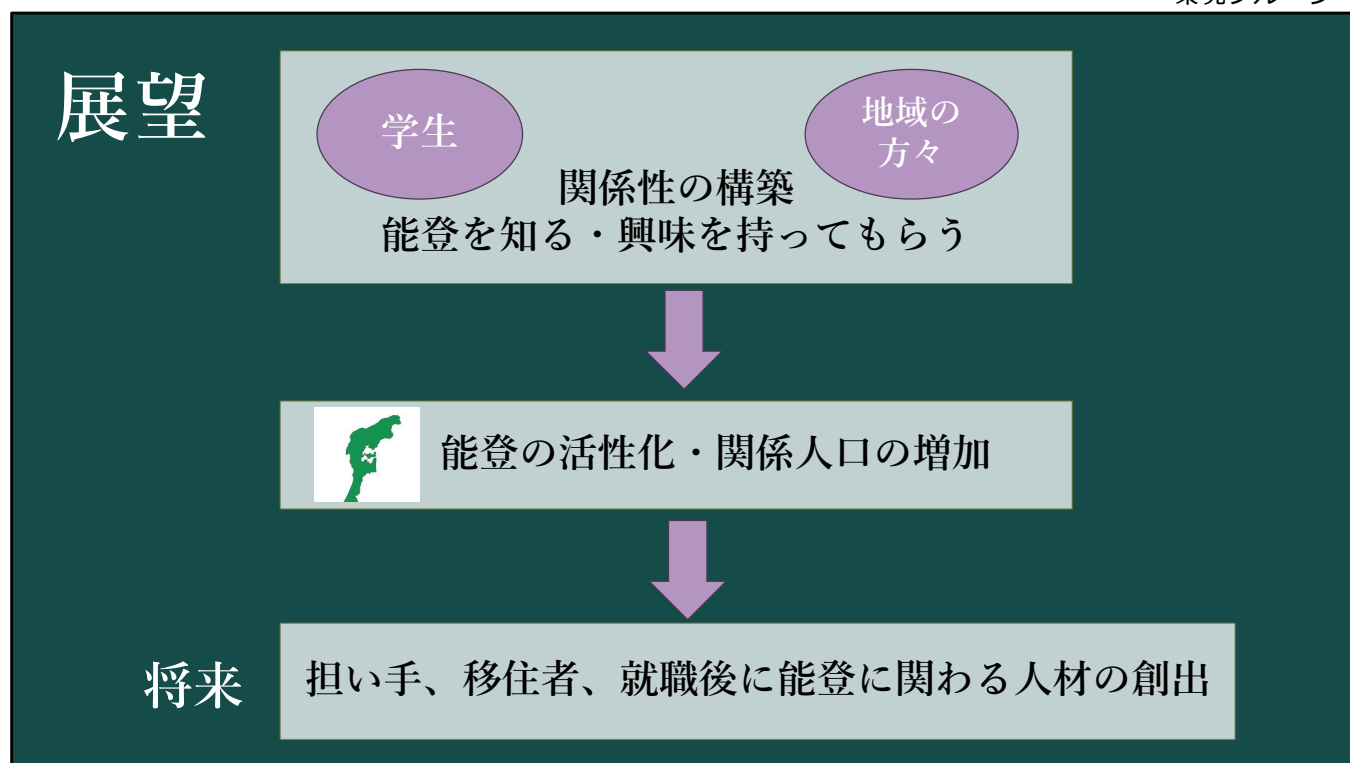
大学村を通じて深いつながりのある大学生が、能登の方々の思いなどを資料として保存したり、論文を書くことで、ありのままの思いをくみとって能登の文化を未来につなげることが出来ます。

たとえ担い手が現れなかったとしても、資料という形で残すことができるので、能登の方々の思いを未来に受け継ぐことが出来ます。

また能登研修で向田の火祭りの方から、「1年かけて準備したのに、ただ当日だけ来て参加して帰る」という言葉を伺いました。

頻繁に準備は出来ないかも知れませんが、大学村では祭りの準備に参加したり、住民の方々の思いを知った上で参加することが出来ます。

また千枚田や塩田などの職人さんと大学村の学生が共に活動することで新たな担い手になる若者が現れるかもしれません。



この大学村では、大学生と地域の方々との深い関係を作り、能登に興味を持ってもらうきっかけ作りを行っていきます。

そして様々な活動を通して能登の地域活性化や関係人口の増加を実現していきます。

そうすることで将来の新たな担い手、移住者を増やすことが出来るかも知れません。

またたとえ能登に住まなかったとしても、大学生が企業などに就職した後ふとした瞬間に能登を思い出し、企業の事業を能登で行うなど、これからも関係人口として能登に関わっていく人材が現れるかもしれません。

## 今の状況

- しらみね大学村を作った先輩と共同で取り組む

## 将来的に

- 2, 3年の長期的な時間で活動の幅を広げる
- 他大学との共同活動により、他大学との交流の場を作る（青陵大学、北陸大学など）
- 勉強会、プログラミングを教え、地方での教育格差の縮小

現在はしらみね大学村を作った先輩方と共同で計画を立てています。  
2, 3年後には能登に大学村を作ることが実現できるように精一杯頑張っています。

## 参考文献

- [https://static.chunichi.co.jp/image/article/size1/a/8/e/2/a8e28ea1414571cb4efdc8cd3f7cd547\\_2.jpg](https://static.chunichi.co.jp/image/article/size1/a/8/e/2/a8e28ea1414571cb4efdc8cd3f7cd547_2.jpg)（令和7年11月5日閲覧）
- [a8e28ea1414571cb4efdc8cd3f7cd547\\_1.jpg](a8e28ea1414571cb4efdc8cd3f7cd547_1.jpg) (640×375)（令和7年11月5日閲覧）